

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：41503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370610

研究課題名(和文) SNSツールを用いた初級日本語学習者の学習戦略の実証研究と学習環境の構築

研究課題名(英文) Empirical Study on Learning Strategies Using SNS Tools for Beginning Learners of Japanese, and Creation of a Learning Environment

研究代表者

澤 恩嬉 (SAWA, EUNHEE)

東北文教大学短期大学部・その他部局等・准教授

研究者番号：50389699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語学習者のオンライン上でのやりとりをコミュニケーション分析した結果、学習者が学習の初期段階から日本語母語話者とオンライン上でやりとりすることで、生の日本語に触れる機会を増やし、日本語使用への自信につながっていることが分かった。特にSNS上では、言語の切り替えが可能なため、初級の段階から日本語母語話者との活発な交流が期待できる。

日本語母語話者との継続的なつながりを支援するためには、教師は学習者の自主的な活動に加え、教室内においても母語話者との交流の機会をできるだけ作り、日本語母語話者にとっても学習者との交流が自身の成長につながり、楽しいと実感できる仕組みを作っていく必要がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, online communications by learners of Japanese were analyzed. The result showed that through communicating online with native Japanese speakers from the early stages of their studies and thereby increasing their opportunities of encountering natural Japanese, learners gained confidence in using Japanese. Social networking sites in particular make it possible to switch between languages, so learners can be expected to interact proactively with Japanese native speakers from the beginning of their studies. In addition to learners' independent activities, in order to support learners' continuing interaction with the native Japanese speakers, instructors must create as many opportunities as possible for learners to interact with native speakers in the classroom, and also establish a structure which is both fun and leads to the development and growth of native Japanese speakers as well.

研究分野：日本語教育

キーワード：学習戦略 学習環境 SNS 初級日本語学習者 遠隔授業 交流型 自立学習支援

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初の背景としては、スマートフォンの急速な普及に伴い、日本語学習者を取り巻く学習環境も大きく変わりつつあった。角南(2012)は、スマートフォンが学習者の日常のほとんどの場面でPCの代わりに使える性能を持ち、さらにいつでもどこでも、ながらも使えるという携帯電話の気軽さも備えているため、「このスマートフォンの普及が引き起こそうとしている変化は、これまでになく重要な転機である」と指摘している。しかし実際に学習者がスマートフォンを持ち、オンライン上で日本語に触れ、日本語母語話者となつながら機会が増えても、その実態が把握できておらず、学習戦略としてのそのような活動が学習者の日本語習得に有効であるかどうかまでは検証できていないのが現状であった。

(2) 研究開始当初の日本語教育の動向としては、学習者主体の学習や学習者同士の共同学習などに目が向けられ、特に、教室外学習での学習者の自主的な活動が大いに期待されていた。しかし、学習者主体の活動においては、教師および支援者の関わり方が大きな課題となっており、特に実社会との結びつきが強い活動ほど、教師側の活動に対する信念と学習者側の信念がうまく噛み合わなければ、学習効果は期待できないという問題があった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、初級日本語学習者のSNSなどオンライン・ツール使用の実態を調査し、オンライン上でのやり取りを学習戦略という観点でコミュニケーション分析することでその有効性を検証することである。

(2) 次に、SNSなどを含むオンライン・ツールを用いた体系的な学習環境デザインを構築し、実際の教育の現場での応用可能性を探ることである。

(3) また、学習者がオンラインおよびオフラインの実社会で作り上げる学習環境に、教師および支援者はどのような関わり方をするのがより効果的な学習に導くことが可能かについて探ることである。

3. 研究の方法

本研究は、(1) 国内・外の初級日本語学習者へ日本語学習環境およびSNS使用に関するアンケート調査、(2) 韓国の高校との遠隔通信による交流型授業の実施、(3) 教室外活動としての日本語母語話者とのSNSによる交流の実施、(4) オンライン上でのやり取りをコミュニケーション分析、(5) 学習環境デザインの構築、(6) 教育現場で

の応用、という手順で進められた。

韓国の高校との遠隔通信による交流型授業については、本研究の代表者が所属する東北文教大学の姉妹高校である韓国正義女子高等学校の1年～3年生の生徒を対象に年6回、合計18回実施した。

また、教室外でのSNSなど日本語学習者と日本語母語話者とのオンライン上でやり取りの分析の際には、談話研究の手法を用いてコミュニケーション分析を行った。

4. 研究成果

(1) 日本語学習者の学習戦略としてのオンライン・ツール使用の有効性について

澤・渡辺(2012)では、日本国内の日本語学習者と母語話者が行うSNS上でのやり取りを分析した結果、「学習者がSNSツールを用いてコミュニケーションを行う目的は、日本語母語話者と同様、仲間同士の交流を一番強く意識している。学習者が形成するネットワークの中に良き仲間であり、支援者の役割を同時に担う関係作りができれば、SNSを有効的な学習戦略として活用できる。」と述べている。

本研究では、国外で日本語を学ぶ学習者と日本語母語話者とのつながりのきっかけを作るために、遠隔通信による授業を取り入れる他、日本語学習者と日本語母語話者が授業外でも自由にSNS上でやり取りができるようにした。SNSによる交流に際しては、参加者同士が「日本語が分からない」「韓国語が読めない」などの言語的な不安から活発な交流ができなくなることを避けるため、事前にグループとして登録しておいた遠隔授業の受講生および担当教員のみが閲覧できる設定をし、使用言語を限定せず、日本語、韓国語どちらでも使いやすい方、使ってみたい方を選んで使用するよう指示した。その結果、日本語初級段階の学習者であっても日本語使用への不安が軽減され、積極的な参加が見られた。また、日本人母語話者においても、学習者との交流が自分にとって有益であり、楽しいと感じる人ほどより積極的な参加が見られた。つまり、日本語母語話者と学習者とのオンライン上でのやり取りにおいては、参加者が参加しやすいと感じる環境作りや楽しいと感じる環境作りが最も重要であることが分かった。

(2) 交流型遠隔授業を用いた体系的な学習環境デザイン

支援者になりうる仲間づくり

澤・渡辺(2012)では、SNS上での日本語母語話者と学習者とのコミュニケーション分析を通じて、教室内での教師と学習者という立場は、教える側、学ぶ側が決まっておき、対等な立場での自然な会話の流れにはなかなかなりにくい、「SNS上でのやり取り

は、教室外環境であり、そこでの参加者の役割はコミュニケーションの仲間でありながら、双方向的な支援者になれる理想的な関係作りが可能である」と指摘している。実際、遠隔授業をきっかけに受講生同士は授業以外でもやりとりが行われ、仲間としての関わりだけでなく、お互い日本語学習や韓国語学習の手助けをするという支援者としての関わりも見られた。遠隔授業はこのように日本国内で学ぶ留学生のみならず、海外で学ぶ日本語学習者と日本語母語話者をつなぐ場として有効的な働きが可能である。特にネイティブとの関わりが少ない海外の学習者にとって遠隔授業は仲間作りの場を提供し、個人と個人がつながりやすいものにするためのきっかけを与えられる。

継続的な学習支援のための学習過程の可視化

遠隔授業を中心とした一連の活動では、来日前の日本語学習の初期段階から学習者の学習過程を分析可能な形として可視化することができる。学習者が作り上げるオンライン上での実社会を調査・分析することで、学習者を取り巻く学習環境の実態を把握することができ、より有効的な学習戦略として教授可能な学習環境デザインを構築することができる。

特に、本研究で行った遠隔授業は、韓国の高校を対象としていることから、今後日本への留学を促すための中等教育機関への働きかけにもなる。海外の中等教育機関から、日本の高等教育機関への円滑な移行のためにも、来日前からの継続的な学習支援が必要であると考えられる。

異文化理解のコミュニケーション・ツールとしての活用

當作(2013)は、ソーシャルネットワークングアプローチでは、異なる文化の人と円滑にコミュニケーションするためには、自分の文化と相手の文化の違いに気づき、人に合わせて第三の文化を作り上げる能力が必要であると述べている。遠隔授業では、異なる文化背景を持つ参加者同士が協同作業を行いながらオンライン・オフライン上でコミュニケーションを行うことで、新しいコミュニティを形成し、つながりをより強いものにしていくことが可能である。このような「つながり」を創り出すコミュニケーション能力は日本語学習者だけでなく、日本語母語話者である日本人学生たちにも同様に必要な能力である。

異なる言葉、文化の違いや空間的制約を越え、協同作業を行うためには、ソーシャルメディアの有効的な活用が必要不可欠である。そのためには、教員主導の授業においても参加者が使いやすいもの、つながりやすいものを積極的に取り入れることによって、よりつながりを強力なものにできると考える。同時

に参加者の活動の様子を教師がある程度把握し、管理することができれば、より使いやすいを実感できるような仕組みづくりが可能になる。

(3) 継続的な交流のための教師の役割

日本語学習者がオンライン上で母語話者とつながり、継続的な交流を行っていくために、教師が担うべき役割は次の四つにまとめられる。

交流の場の提供者：教室内・外において受講生同士が自由に交流できる活動の場を作ることである。活動内容の企画者：受講生が継続して関わりたくなる仕掛け作りが重要である。仲間であり後見人：仲間の一員として交流の場に参加しつつ、後見人として活発な活動を促すことが必要とされる。活動のチェック・観察者：うまく交流できた部分とできなかった部分の原因分析を行い、迅速に活動内容の修正を行うことである。このような一連の流れを繰り返し行うことで、継続可能な交流の場としての授業を作り上げることが可能であると考えられる。

引用文献

當作靖彦(2013)『NIPPON 3.0の処方箋』講談社

澤恩嬭・渡辺文生(2012)「SNSツールを用いた学習ストラテジーの有効性について—SNS上での情報のやりとりを中心に—」『日本語教育方法研究会誌』19(2),pp.24-25.

角南北斗(2012)「スマートフォンの普及で変わる教材設計」『日本語教育方法研究会誌』19(2),pp.42-43.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

澤恩嬭・渡辺文生(2014)「初級日本語学習者のための「つながり」を目的とした遠隔授業の実践」『日本語教育方法研究会誌』19(1),56-57.査読有

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009804298>

澤恩嬭・中林幸子(2013)「遠隔授業を中心とした日本語学習環境デザインの試み」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部教育研究』第4号,31-41.査読有
<http://id.ndl.go.jp/bib/025289570>

中林幸子・澤恩嬭(2013)「大学教育における遠隔授業の目的とその実態」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部教育研究』第4号,43-51.査読有
<http://id.ndl.go.jp/bib/025289575>

〔学会発表〕(計 2 件)

澤恩嬉・中林幸子・渡辺文生「初級日本語学習者を対象とした交流型遠隔授業における教室の役割-継続的なつながりをめざして SYDNEY-ICJLE2014
研究大会 2014 年 7 月 11 日シドニー(オーストラリア)

澤恩嬉・渡辺文生「初級日本語学習者のための「つながり」を目的とした遠隔授業の実践」日本語教育方法研究会 2014 年 3 月 15 日横浜国立大学(横浜市)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤 恩嬉 (SAWA Eunhee)
東北文教大学短期大学部・総合文化学科・
准教授
研究者番号：50389699

(2) 研究分担者

渡辺 文生 (WATANABE Fumio)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：00212324

中林 幸子 (NAKABAYASHI Yuki ko)
四国大学 文学部 講師
研究者番号：70610442